

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第505号 2024年4月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 潜在と芸術

### 玉本 奈々

「自由に創ってください。」  
 不安そうな目で私を見る子どもたちの表情が、キラキラと輝く瞬間である。その表情から滲み出る、眩いばかりの純粋で美しい内層を感じたとき、私は芸術が人に与える内面的影響を再認識する。

私は美術家である。主な活動として、芸術制作や展示、執筆、著書などがあり、不定期による子どもたち向けのワークショップも併催している。その活動歴の中でも印象深いもの一つとして、市の記念事業個展に際し併設した、暗幕内で見せる空間芸術がある。

「つながる大切さ」をテーマに、某小学校や中学校、支援学校の授業の一環として、願いごとをしたためた色紙を紙漕り状にし、繋がる

れた紐の束を、私が造形物に仕上げる。その造形物と私の立体作品「捻転」とを向き合わせ、インスレーションとしての公開を試みた。子どもたちは、自らが制作した紙漕りが造形物となり、美術家の作品とコラボレートする様に驚愕しつつ、制作の喜びを語った。

その造形物は、会期終了後に神社の左義長で燃やし、願いごとを天に返した。

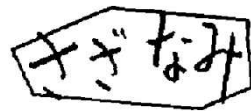
支援学校選定の折には「できない」という大人の思考も多数寄せられる中、私の「できる」という意向を通して頂いた。手で描く必要はないこと、そして技術ではなく精神で描くことの重要性を、子どもたちの制作と共に再認識する、喜びに溢れた授業となった。

デザイナーとして就業の後24歳より美術家に転身、今に至るまで、私はヨーロッパに頻りに赴く機会に恵まれた。20年以上前から、教会や美術館には、学校教育として引率された子どもたちを見掛けない日はなく、またその子どもたちは、自由に絵画や教会内部のデッサンをし、内容を暗黙に理解する。場の全てが教育であり、その場を生かした素材の伸ばし方には、見習うべき点が十分に存在するだろう。日本には無い光景である。

帰国後私は美術館に赴き、後の光景を納得しつつ、デッサンをするべく鉛筆を取り出した。案の定その瞬間、館内の方より注意を受けた。著作権他に伴う「If」の尊重と慎重は大切な行為ではあるが、これが現実であり、今もその些少の緩和は見受けられない。

幼少期から養うべき「見る」力を、美術家という視点から育てたいと思う。そしてそれは、感性は勿論、教養や健全な精神、勉学に通じる道筋だと、私は信じている。

(現代美術作家・著者)



▼令和5年度の入学式に「あ・い・う・え・お」のことを話しました。「あ・あ・いさつ」「い・いっも本当のことをいう」「う・うれしいことを見つける」「え・鉛筆を正しく持つ」「お・大きな声」ということを分かりやすくしたものです▼令和5年度の卒業式にも、卒業後も大事にしてほしいこととして「あ・い・う・え・お」のお話をしました。小学校が大事にしてきたことの内容です。大卒は入学式の内容とは変わりますが、「あ」は、挨拶が出来ることに加えて人間関係の基礎であることを、特に「あ」がとうございます」を大事にしてきたことも含めて学校あげて育てたことです。「い」は、事実をしっかりと見る目を持つてほしいこと、正しい情報かどうかを見極める力が大事なことです。「う」は嬉しいことを増やす語彙力をたくさん持つこととその方法。「え」は鉛筆につなげて書くことが大事だということをもとめました▼「お」は「声の力」にふれました。6年間、毎日のように音読の時間を設けました。更に、毎週の音読集会において暗誦した古典文章の音読です。小学校として自信を持って中学校で生きる学力として後押しがしたかったからです。▼日本語の母音である「あ・い・う・え・お」が学校の教育目標である合言葉「国語力は人間力」として手応えがあり、礎になっていたので

(吉永幸司)

「つるつる」と「やわやわ」  
少徳 信

今年度は3年生を担任している。国語の一番はじめの教材は、谷川俊太郎の「どきん」だ。読んでいてリズムが心地よく、どこか不思議な感じもするこの詩を通して、子どもたちがもっている言葉の感覚を引き出したいと考えた。というのも昨年度までの実践の中で、言葉の意味や解釈に重心を置きすぎるあまり、考えるだけの詩の授業になってしまっていたからである。今まで受け持った子どもたちは詩を難解に感じ、つまらなく思っていたことだろう。せっかくなの詩の授業、「楽しかった」と思ってもらいたいと考えながら授業を始めた。

T「さわってみようかなあ つるつる」。つるつるってどんな感じ？さわってみて

C1「こころつるつるやで！（筆箱の表面）」

C2「こころも！（窓ガラス）」

他にも、黒板、ロッカーの木の部分、机の裏の金属の部分、オルガンのプラスチックのカバーなど、教室中のありとあらゆるものが出てきた。ここである一人が、

C3「いや、黒板はつるつるじゃなくてさらさらやろ」と言い出した。

C4「いや、今の黒板はさらさらで、きれいに消した黒板はつるつる」

T「どういうこと？」

C5「チョークのついた黒板は、さらさらしてるからさらさら。きれいな黒板と違って、キュッてなるからつるつる」

C6「ああ、砂みたいな感じない」

T「砂つてさらさら？」

C7「砂場の砂はさらさらで、普通の砂はざらざら」

C8「いや、砂場の砂もざらざらやろ。もっと砂浜みたいな砂じゃないと」

C9「でも、普通の砂よりはさらさらじゃない？」

C10「まあ、じゃあさらさらって感じが」

C11「チョークの粉がさらさらやったらさ、チョークの粉を入れる所の粉つてめっちゃさらさらやん」

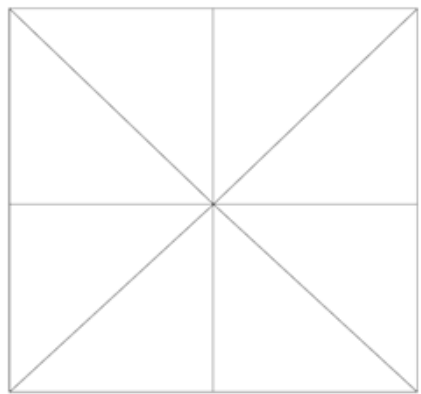
C12「たしかに。それが最強のさらさらや」

このような会話をしながら、「つるつる」「さらさら」という言葉の違いや、その続きに出てくる言葉を感じに照らし合わせながら獲得していった。もしも、「つるつる」の意味はこうで、「と」教師が解説していたら、子どもたちは何も得られなかっただろう。子どもたちが自分の経験から言葉を認識していった姿が印象的だった。

以前高丸もと子先生の詩の勉強会に参加した際、「表現は教えられない。表現は引き出すことができる」ということを教わった。きつと、言葉に対する感覚も似たところがあるのではないかと感じる。子ども一人ひとりの生活や人生経験がもととなった感覚は、言葉の力を高めていくのに必要不可欠な要素の一つだろう。辞書的な意味だけの言葉の獲得ではなく、子どもが豊かになるような、生きてはたらく言葉の獲得を目指して、今年度も子どもたちと関わっていききたい。

(彦根市立高宮小学校)

「漢字遊び」を用いた  
授業開き  
高木 富也



令和六年度が始まった。今年度は五年生の担任となった。二年前は三年生でも担任していた子どもたちである。お互い知った仲、空気感ではあるが、中学年から高学年となった子どもたちを、国語科を中心にしたしっかりと力をつけていきたい。

国語科の授業開きでは「漢字遊び」を用いた活動を取り入れた。授業開きで意識したいことは、「誰でも取り組める」「簡単である」「自然と交流したくなる」「楽しい」「ことだと考える」。

「どんな漢字が隠れているかな？」図に示す枠を用意し、どんな漢字が隠れているか考え、書く活動を行った。とめ、はね等の正確性は細かく考えすぎず、見えてきた形を書いていく。一、口、十、王人、火、区など、少し形を工夫した漢字を見つけることができている。

これらの活動を進める上で大切にしたいことは、「説明しすぎない」「漢字を探してください。はいどうぞ。」大げさではなく、この程度の説明である。もちろん子どもたちは戸惑いが生まれる。さつと取り組む子、キョロキョロしている子、質問してくる子：様々な反応があった。質問に対しても、基本的に「いいですよ。やってごらん。」という程度にしか返答しない。そうすると、子どもたちはつぶやきながらプリントを書いていき、自然と近くの友達と交流を始めた。席を離れて、昨年クラスが同じだった仲の良い友達に聞きに行ったり、教師に進捗度合いを報告しに来たりする姿が見られる。児童観察にも、もってこいの活動であった。

「課題と出会う↓自分で考える↓友達と交流する↓全体で話し合う↓解決する↓次への意欲を高める」これらの授業の理想的な流れを、授業開きという約二十分の中で行うことができた。授業の最後には、「今回のように、みんな考えて、とても楽しくて、課題解決をしていくような授業を、一緒に創っていきましょう。」と、教師がめざす授業像を共有した。子どもたちは知的で楽しい活動が良かったように、休み時間にも「これもありじゃない？」「俺〇個見つけた！」という声があった。

五年生は、非常に行事の多い学年である。もちろん授業内容も難しくなる。子どもも教師も、余裕がなく場面があるかもしれない。だからこそ今回の実践のように、誰にとっても簡単に、ちよっぴり考えて、たっぴり楽しみたい。そんな国語教室をめざしたい。

(東近江市立能登川南小学校)

遊びの時間  
司削 裕之

息子が一年生の時、朝が弱いせいもあってか、進んで学校に行きたがらない時期があった。特にこれといって嫌なことがあるわけでもなさそう、学校から帰ってきたら「楽しかった」と言っている。しかし朝になると、また行き渋る。毎日ように遅刻していた。

ある日、たまたま早起きができたら朝があった。いつものように仏頂面で出かけたが、帰ってきて一番のニュースがいつもとは違った。

「朝早く学校行ったら、いっぱい遊べた。」

次の日から、息子はとても早起きをするようになった。余裕を持って朝の支度をすませ、意気揚々と家を出た。早い時間に学校に着くので、朝のうちにやるべきことが全部終わり、中間休みも丸ごと遊べるようになった。家に帰ってから、近所の友達と遊ぶために、宿題をすぐに終わらせるようになった。夕飯の食卓では、友達と遊んだことが話題にあがった。生活が、家から学校へと移っていくのを感じた。

今年度、一年生を担任することになった。本校では、入門期のスタートトカリキュラムとして、入学してしばらくは授業一時間分の長さを通常より短くしている。また、公共の交通機関を利用しての子がほとんどのため、午前中で下校し、教員引率のもと帰り方の勉強をする。これまでの生活から小学校生活のリズムに緩やかに移行していくことで、子どもたちの心や

体に負担がかからないようにする。

入学式して二日目のこと。他学年と時程が異なるため、教室で学習中に中間休みが始まった。子どもたちの声が聞こえてくる。五分休憩には、グラウンドが見える窓に張り付いて、上級生たちが楽しそうにしている様子を見ていた。

「早く二年生になりたい。」

その日の下校時に、一人の子がつぶやいた。

次の日、予定していたより早く、グラウンドで遊び方の勉強をすることにした。遊具は順番を守って使うこと、お友達をつかんだりしないこと、遊びの中に、学びがたぐさんあった。誰もいない一年生貸し切りのグラウンド。たっぷり遊んだ後に子どもたちが言った言葉は、「先生、休み時間はまだですか。」だった。どうやら子どもたちにとって「遊び方の勉強」の時間は、遊び時間ではなかったようだ。

「一年生が今日から中間休みを過ぎします。赤帽子をかぶっているので、クラスでお声かけください。」

職員掲示板にそう書き込んだ日、グラウンドに出てきた上級生がすぐに赤帽子を見つけて駆け寄ってきた。お兄さんお姉さんたちと一緒に遊び、チャイムが鳴ったらお兄さんお姉さんたちと一緒に教室に戻った。

「先生、算数はまだですか。」

満足したことが分かる一言、あましよう。それでは、授業を始め

(京都女子大学附属小学校)

持続可能な学習習慣を  
谷口 映介

新しい年度が始まり、子ども達のやる気・期待が高まる四月・五月は学習基盤を確立する大切な時期である。担任する時に気を付けていたことを何点か紹介したい。

一、鉛筆の持ち方・美しい姿勢

どの学年においても、学年当初に確認しておきたい。本町では、「どん・ぺた・びん」や「立腰」を合言葉に美しい姿勢で学習に向かうことを大切にしている。子ども達に一年を通して意識できるように促したい。

二、語彙を広げること

「国語辞典と親友になろう」

語彙が豊かになると、国語科のみならず、全教科の学びも深まる。学習の最初に習慣化していたのが教科書巻末の語彙一覧を国語辞典で引くことである。第四学年である「人物の行動を表す言葉」「人物の様子を表す言葉」「物事の様子を表す言葉」が一覧として掲載されている。活動の流れは次の通りである。

- 学習の冒頭三分間程度で行う。
  - 一覧から教師が選んだ言葉を聞き取って一五秒間で引く。
  - 意味と用例を発表する。
- 最初の内は時間がかかるのだが慣れてくると早く引けるようになる

り、「次の言葉は何かな。」と予想しながら待つようになる。時には「人物の性格を表す言葉」(第三学年の教科書)からも問題を出すと、人物像を話し合う時に大いに役立つ。子ども達は、なじみのある「やさしい」を使いたがるのだが、これだけでは人物を多面的に見ることにはつながりにくい。そこで、教科書のコピーや作成した一覧表から選択し、その理由や根拠となる叙述を出し合うと、話し合いが広がっていく。そもそも、「やさしい」という言葉の意味もあいまいなこともある。分かったつもりになっているのである。その証拠に「やさしい人とはどんな人のこと？」と問うと、イメージは人によってバラバラなのである。身近な言葉でも意味を予想し、改めて国語辞典で自分の考えとのズレを確かめてみるのも面白いものである。他にも、「物事の様子を表す言葉」の一覧の中から三つ以上の言葉を選んで日記で使ってみようと投げかけると文脈の中で使える力へとつながる。

三、全員参加の音読

学習の冒頭に個人で音読すること効果的である。二時間・三時間など時間を区切って教材文を早口で読む。口を大きく開けないと読み切ることができないので、真剣そのもので読むようになる。大切なのは、継続II持続可能なことである。言葉の基礎作りを大切にしたい。

(竜王町教育委員会)

